

柿山 隆 先生へ贈る言葉

経営学部教授 大 島 正 克

柿山 隆先生は、2011（平成 23）年 3 月 31 日をもって、亜細亜大学経営学部を定年退職され、同年 4 月 1 日に、亜細亜大学名誉教授になられました。ここに謹んで柿山先生へ贈る言葉を述べさせて戴く次第です。

小生が亜細亜大学経営学部専任助手として奉職致しました 1981（昭和 56）年には、柿山先生は助教授（現在の准教授）でいらっしゃいました。今でいう全学の共通科目をご担当の先生は教養部という組織に所属しておられた関係上、柿山先生もフランス語の先生でいらっしゃったので、当時の所属は教養部でした。

当時、現在の「出会いの広場」の前身である FOC（フレッシュマン・オリエンテーション・キャンプ）という新入生対象の催しがありました。入学式終了後の 2 泊 3 日、山中湖畔の民宿に、新入生と先輩の補助学生と我々教職員が共に寝泊りし、親交を深めるという催しです。その後の「出会いの広場」のような立派なホテルではありません。小さな民宿に各学部の新入生はいくつも分散して泊まりました。新任の小生の初仕事は、この FOC に参加し新入生と共にこの 2 泊 3 日を過ごすということでした。補助学生の指導のもと、新入生とともに、山中湖畔に早朝から出かけ、第一学生歌を大声で肩を組み合って歌いました。民宿の座敷では、補助学生と新入生が輪になって、亜細亜大学初代学長太田耕造先生の『建学の精神を語る―自助協力の開拓魂―』を輪読致しました。このとき、小生も「秋」を「とき」と読むのを覚えました。

こうした学生との交流を終え、教員は教員用に用意された一室に戻ります。そこには、電気炬燵があり、先生方はその炬燵に入れる位の数である 3、4 名ずつが各民宿に配属されていました。そこに、運命の出会いがありました。この部屋に声の大きな男の先生と極めて上品な女の先生がいらっしゃいました。その声の大きな先生がフランス語の柿山先生であり、上品な先生が英語の小山浩代先生でした。この中に小生は、新人として加えて戴くことになりました。亜細亜大学に奉職して最初の仕事だっただけに、小生としては極めて印象深く、今でもこの場面は鮮明に思い出されます。この関係から、柿山先生と小山先生には、その後も大変親しくして戴くこととなりました。小山浩代先生は、柿山先生より 2、3 年早く早期選択定年退職され、早稲田にあったご自宅から、小生が住んでおります国分寺市に転居され、それも小生の家の割と近くにお住まいになっておられます。

柿山先生は、その後、学問研究と教育面のみならず、大学行政面でも、大変活躍なされ、教養

部の部長を何期も務められ、さらに大学理事もお務めになり、ご定年後の現在も大学理事をなさっております。

大学も変化がないようで、実は大きく変化しております。20世紀が終わろうとする頃、大学組織において、教養部を廃止し、先生方は各学部に分属するということが本格的に動き始めました。とりわけ、教養部においては重大な出来事です。変化を好まないのが大学です。当然反対もあったと聞いておりますが、柿山先生は教養部長として、教養部全体を取りまとめ、分属への実現に大いに寄与されました。2001(平成13)年4月、教養部の先生方は、経営、経済、法、国際関係の各学部に分属されました。4分の1の確率ですが、経営学部への分属の先生方の中に、柿山先生もいらっしゃいました。20年を経て、柿山先生とは再びご一緒させて戴くこととなりました。この分属の時期、小生は経営学部の学部長を拝命しており、お迎えする側の学部長として、柿山先生には、本当に色々お世話になり、また多くのことをご教授賜りました。お蔭様で、経営学部では、教養部の先生方と経営学部の先生方とは円滑に融合ができ、現在に至ることができました。これも柿山先生のご尽力に負うところが大変大きいと感謝致しております。

その後しばらくは、小生は、博士論文の執筆の大詰めにて半年のサバティカルなども戴くなどして研究の方に集中しておりましたが、お蔭様にて何とかそれも成就した後、2006(平成18)年から再度、経営学部長を務めることになりました。その頃、柿山先生は既に何期も理事(6号理事)を務められておられましたので、まさに大学の進むべき道を、詳細にご教授して戴くことになりました。経営学部内では、ホスピタリティ専攻(定員40名)をホスピタリティ・マネジメント学科(定員90名)に改組することとなり、その実現に向け、全学の学科設置委員会等も設けられ、全学的に学科新設の了承を戴く難しい時期になっておりました。全学的に見れば、かなりの反対もありました。そうした混沌とした中、常に適切な指針とアドバイスを、柿山先生は与えてくださいました。先生の大いなるご尽力を持ちまして、2009(平成21)年4月、経営学部の新学科ホスピタリティ・マネジメント学科が船出することができました。亜細亜大学としては、約20年前に、国際関係学部が新設されて以来の新組織の誕生となりましたが、この画期的な新学科の誕生は、柿山先生のご尽力なくしてはありえませんでした。先生の見識と指導力に心から感謝致しております。

柿山先生は、2011(平成23)年3月31日に亜細亜大学を御定年により御退職されましたが、その日まで、亜細亜大学硬式野球部の部長でもいらっしゃいました。大変熱心な部長であり、春秋のリーグ戦中は、時間の許す限り神宮球場にお出かけになり、監督、コーチ、そして選手を励ましておられました。常勤理事会や本理事会の折にも、皆様に経過報告をしておられました。野球部部長の務めはそれだけではなく、経営学部には野球部員が多いこともあり、一般学生とは別に1年生には野球部員のためのオリエンテーションのクラスがありますが、その担当も自動的に割り当てられることになります。この野球部クラスは、リーグ戦中は授業ができないために授業回

数が不足することになります。授業回数を補うために時には日の出の寮にまで出かけて授業をしなければならない場合も生じます。こうした大変なことも自然にこなしておられたようです。と申しますのも、これも柿山先生と小生との御縁でしょうか、先生が御退職後、小生が先生の後を継いで硬式野球部の部長を務めることになったために、分かったことでもあります。初めての春のリーグ戦を終了して、その大変さも身をもって実感致しました。今シーズンは、申し訳ございませんが、第1部リーグで3位に終わってしまいました。いつか、リーグ戦にて優勝し、先生に御報告ができれば、と存じます。その時を楽しみにしててください。野球部長になって感銘したことがあります。野球部員は、毎日、しっかりと日誌を書いているのです。これも聞くところによると、柿山先生が部長時代、野球部員の文章を書く力が足りないことを憂慮され、まず、毎日文章を書くようにと御指導されたようです。何でも継続は力なりです。このところ、野球部員の文章力は一般学生よりも上回るようになってきたと申し上げても過言ではありません。初めからできないとして諦めるのではなく、継続的に努力することを、学生に身をもってお示しなされたのでした。まさに教育とはこのようなことかと、小生、大いに感銘した次第です。

柿山先生との御縁の話の最後は、「ガレージ」という床屋さんがお互いの行きつけの床屋さんという御縁です。ここで、先生のご性格がよく現れていることに気がつきます。最近の床さんは予約制になっていますが、先生はその予約時間の30分前に来られるそうです。最近は、「ガレージ」さんも、先生のご性格が分かり、早く来られる分も織り込んで予約のお時間を決めるようにしておられるようです。このことはご本人も気がついておられるかどうかは直接確かめておりませんので、確かではありません。同様に大学での会議の場合も、まず1番に来て待っておられます。それが分かって、会議が共通な場合は、小生も早めに参りますが、それでも先にきておられ、いつも「大島君、遅いじゃないか」といわれることになります。会議室にかなり早く到着して先生に次いで第2番目でも、「遅いじゃないか」ということになります。ということで、二人が早く会議室に到着することになり、会議が始まるまでのかなりの時間、先生といろいろとお話することができました。この機会を有効に使って先生からさまざまな指示や提案を戴くことも多々ございました。時間に正確というより時間より早く何でも対処するというご性格により、授業もチャイムが鳴る前には、教室に到着され、始業のチャイムが鳴ると同時に授業を開始されます。これもできそうでなかなかできるものではありません。小生もこうした時間に正確に行動をされる点について、これからも大に見習わねばならないと存じます。

柿山先生は、釣りとワインが大好きと聞いております。このような素晴らしい先生と亜細亜大学ならびに亜細亜大学経営学部という職場を共にすることができたという誇りを胸に、さらに前進することをお誓い申し上げ、贈る言葉とさせて戴きたく存じます。

柿山 隆先生、長い間本当に有難うございました。これからの先生の益々のご活躍とご健勝を心から祈念致しております。

(平成23年6月吉日)